

銀行員のための



経営科学研究所
主任研究員 井坂康志

しばしば言われることだが、現在、日本をはじめとした先進諸国は100年か200年に1度の大変化に直面しているという。このことを最初に明言したのは、私の知る限り最近辞任したA. グリーンスパン元FRB議長だった。彼は1990年代半ばの情報通信に関する技術的変化の萌芽を目にして、巨大な変革の胎動を感じたという。

だが、人間社会にとって大転換ははじめてではない。たとえば、日本もわずか百数十年前に封建制から近代への革命的变化に遭遇していた。そこで今回は変革期にあって日本の近代を支えた先哲の書を事例として紹介していくこととした。

はじめにお勧めしたいのは、渋沢栄一の自伝『青淵夜話』(『実業の思想』(『現代日本思想体系11』)筑摩書房に収載)である。彼の近代経済構築における功績については恐らく多くがご存じだろうと思う。現在も全国地方銀行協会近くの常盤橋公園で朝倉文夫作の青淵渋沢栄一像が都心を見守る。

彼の自伝はかつてほどは読まれなくなっているのか、復刊されていない。だが、今もよく読まれる福沢諭吉の『福翁自伝』と肩を並べる近代化の象徴的個人史であり、読む者を痛快な思いに誘う良書である。渋沢は天保11年に埼玉県の深谷に生まれた。家は農家であったが、青年期に時勢に激して志士となり、後に幕臣となった。慶應3年に欧州視察に同行し、西洋文明と民主主義、自由主義の考えに触れる。明治6年には新政府の下、第一國

立銀行頭取として経済産業界を指導した。現在の一橋大学、日本女子大学の創設にも関わるなど、広域的な構想を現実に移した人物でもある。全編を通じて、フロンティア・スピリットが充溢している。

かつて歴史学者の市井三郎は、歴史における特異点の存在を指摘した。特異点とは、歴史が変化していく過程で見られる不思議な瞬間である。この点を通過すると、人間が一般に共有する価値観、文化をはじめ、おしなべて意識や環境がまったく変わってしまう。あらゆる前提が変貌してしまう。かつて新時代を建設した渋沢はいわばこの特異点を挟む2つの時代を生きた人物と見ることができよう。事実、現在ある金融システム——銀行、証券、保険等すべて——といった100年以上継続的に機能する基盤はほぼ彼の創意によるものである。また、500以上の企業の創設にも関与し、産業団体の組織化にもその手腕を発揮した。恐らく当時から彼の存在は狷介なものであったろうと想像するが、文明の分岐点にあっては、必ず彼のようなトリックスター的存在が出現し、大きな枠組みを創造するのが歴史の常である。

次は経済人のものではないが、明治時代を代表するキリスト者・内村鑑三の小著『後世への最大遺物』(岩波文庫)を挙げたい。本書は内村が33歳の講演録を基礎としている。小冊子だが、内村にとってお気に入りの書だった。

人生とはさまざまな艱難辛苦に満ちている。

変事は絶え間なく人を襲う。しかし、いかなるときでも、人は後世に何事かを残したいという根源的欲求から逃れることはできない。内村自身も、一高不敬事件に代表されるように人生の多くの世の支配的な価値観に与せず、反骨のアウトサイダーとして送った。それゆえの一般世論からの激しい指弾を受け、ひいてはキリスト教会からも見放された。

彼にとって後世に残るものとは、「勇ましい高尚なる生涯」であるという。そして、「この世の中は悲嘆の世の中でなくして、歡喜の世の中である」という考え方をわれわれの生涯に実行し、その生涯を世の中への贈物として世を去ることである。つまり道の終わりに目標があるのではなく、道そのものが目的なのだとする。

ささやかな日常のなかで林檎の木を植えていくのが人生そのものの偉大さである。今は一本の苗木でも、継続的に植えていくならば、いつか豊かな森が繁茂する。そして、鳥や獣、人を養うようになる。生きていればこそ苦難もつきない。しかし、この人生も無駄ではないという希望の言葉が本書から紡ぎ出され、感め得ることができる。文庫版には『デンマルク國の話』も掲載されているので、こちらも合わせてお読みいただきたいと思う。

次は少し時代は下る。戦前には反骨のジャーナリスト、戦後には総理大臣として活躍した石橋湛山の書である。彼の主要論文・記事は『石橋湛山評論集』(岩波文庫)でほぼ完全に読むことができる。石橋の実践的理想追求のエッセンスを見事にまとめ上げた名編集だ。

石橋は山梨県の寺の出身である。後に東洋経済新報社で経済記者として活躍するが、常に魂は宗教者であったという。論文には持論として時代を射抜く鋭い洞察に満ちたものが多い。ここでは、『評論集』にも掲載されている「先ず功利主義者たれ」という記事を特にお勧めしておきたい。軍縮をテーマとした比較的初期のものだが、石橋の基本姿勢が実によく表れていると思う。

しばしば功利主義とは利己主義と混同されるがそうではない。彼はまず功利主義者たるべき理由を、「我れの利益を根本として一切を思慮し、計画することである。我れ利益を根本とすれば、自然対手の利益も……感情も尊重せねならぬことになる」とする。つまり功利とは自分の立場を堅持しつつ、相手の都合をも尊重とともに成長する姿勢なのだ。これはきわめて高度な戦略思考そのものである。

後に日本が戦争に敗れたとき、荒廃した国土を眼下に收めつつ、彼はこれからは軍国主義ではなく、平和と産業による新日本の建設というヴィジョンを掲げた。「更正日本の進路——前途は實に洋々たり」は彼の魂を表現して余りある新日本への祝辞であった。まさに卓越した慧眼といわざるをえない。

彼らの時代状況は、現代につらなるものがある。石橋が生きた当時、よるべなき民衆は絶望し、そこに好餌を得たファシズムや社会主義が世界を地獄に変えた。現代では戦争や革命こそ起こっていないが、技術や産業といった地殻変動に制度や意識がついていくない。物質的変化と精神的変化の歩調が乱れるところから深刻な真空(アノミー)が生まれ、ここから深刻な社会変動が生まれることが多い。

今回挙げた3人に共通するのは、時代のはじまりと終わりを鋭く洞察し、かつそれに新たな生命的ヴィジョンを注入したところにあると思う。さらにいうならば、経済や社会に必要な精神的支柱の存在を見抜き、目に見える形で示した点にある。彼らは湿った古いマッチ箱を捨てて、新しいマッチの所在を探って火をつけた。この灯火は今も消えていない。

現在を終わりと見るかはじまりと見るかは議論の分かれるところだが、いずれにしても過去の常識が日常生活のなかで通用しなくなっていることは確かだ。新しいマッチをするときは誰でも恐い。そんなとき勇気ある先人の言葉ほど希望を与えるものはない。